

# 市道清水線試掘調査概報

新林遺跡 (Shinbayashi)

糺神社2号墳 (Tadasu-Jinja II)

1993

島根県安来市教育委員会

## 序

私たちの住むこの安来市は、太古から資源に富み、そのため古墳をはじめとする古代の人々の生活の跡が多くのこされています。

その生活の跡を我々は遺跡と呼んでいますが、それは土地の歴史を知り、当時の人々の生活を推しはかる手懸かりを与えてくれる貴重な遺産であることは言うまでもありません。

今回の試掘調査は市道安来・清水線新設計画に伴うもので、古墳時代前期の古墳をはじめ、中世の墓まで貴重な遺産が試掘調査でありながら数多く発見されました。

本概報は、これらの調査を記録し、まとめたものであります。

多くの皆様が、この概報により少しでも埋蔵文化財に関心を寄せていただき、先人の残した文化がどのようなものだったか理解していただく糸口になれば幸いです。

最後になりましたが、この調査に携わって御協力をいただいた関係者各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

安来市教育委員会

教育長 三島俊夫

## 例　　言

1. 本書は、市道安来清水線新設に伴う試掘調査の概報である。
2. 本書収録遺跡は、島根県安来市宮内町字新林376-1番地他に所在する。
3. 試掘調査は安来市教育委員会が主体となり、1992年12月2日から1993年2月10日までの間、永見 英を調査主任として実施した。
4. 本書の執筆、編集は永見 英を主任として、金山尚志の協力のもと、野坂俊之が行なった。
5. 調査および整理において、次の各氏の指導、助言を得ることができた。記して感謝の意を表したい。

東森市良（安来市文化財保護審議委員・県立安来高等学校教諭）

松本岩雄（島根県古代文化センター企画員）

丹羽野裕（島根県埋蔵文化財センター主事）

錦田剛志（島根県埋蔵文化財センター主事）

6. 調査体制は以下の通りである。

調査主体安来市教育委員会

事務局 三島俊夫（安来市教育委員会教育長）

高塚輝雄（同教育次長兼文化振興室室長）

大野雄司（同文化振興室主任）

松沢君子（同臨時職員）

調査員 永見 英、野坂俊之、金山尚志

調査参加者 田中秋男、日野 登、前田久義、前田和久、周藤房雄、恩田 寛、

安部弥吉、三島龍市、伊藤 清、前田利男、川合 章、大森 妙、

木戸澄子、飛田光代

調査協力 安来市土木課

7. 遺跡図版（図面・写真）、出土遺物は安来市教育委員会で保管している。

8. 報告中的方位は磁北であり、方位のないものは上面が北を示している。

## 目 次

### 序

#### 例 言

調査の契機と経過	1
遺跡の地理的・歴史的環境	2
調査概要	4
新林古墳	4
糺神社2号墳	9
第2号墓	11
第4号墓	12
遺物観察表	13
まとめ	14

## 挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	3
第2図	遺跡地形図および遺構状況	5
第3図	土層断面図	6~7
第4図	新林古墳 主体部実測図	8
第5図	新林古墳 出土遺物	9
第6図	糺神社2号墳	10
第7図	糺神社2号墳 主体部実測図	11
第8図	第2号墓	11
第9図	第2号墓 出土遺物	12
第10図	第4号墓	12

## 図版目次

- 図版1 新林遺跡遠景
- 図版2 第1号墓
- 図版3 第2号墓
- 図版4 第2号墓遺物出土状況
- 図版5 新林古墳主体部
- 図版6 新林古墳西側周溝遺物出土状況
- 図版7 新林古墳東側周溝土層状況
- 図版8 第4号墓
- 図版9 第5・6号墓土層状況
- 図版10 第7号墓土層状況
- 図版11 札神社2号墳
- 図版12 札神社2号墳主体部

## 調査の契機と経過

安来市道・安来清水線は、現在官内町中央を通る市道の混雑、狭小さを解消するうえで必要であることから10年来の懸案であった。過去、本線ルート上に周知の遺跡が多数かかり、ルート変更を余儀なくされてきた経緯がある。今回のルートは丘陵の尾根上を通過することなく市道建設はあり得ない地形的な制約の中で、当遺跡の北側は既に採土のため大半を掘削されており、また大部分谷部を通過することを鑑み、慎重に決定された。

しかしながら、周知の遺跡である「札神社2号墳」のすぐ脇を通過すること、平坦状の尾根をかすめること、標高39mの山頂付近は古墳らしき様相を示していることなど、遺跡である可能性は当初から高いと思われた。調査は、1992年11月30日に、調査主任 永見 英、野坂俊之、田中秋男によって調査区設定のための踏査から開始された。12月2日、本線ルートの中央に当たる部分の谷に8m×2mのトレンチを設定、表土排除を行ない、本格的試掘調査を開始した。

12月4日、尾根上に第1トレンチと第2トレンチを設定、12月7日に中世墓を検出した。

12月9日には、本線ルート中央に当たる斜面に第3トレンチを、尾根上に第4トレンチをそれぞれ設定、12月14日に第4トレンチから土壙墓を検出した。

その後、「札神社2号墳」がルートにかかりそうなことから、墓域確認のため、新たなトレンチを設定、試掘範囲を広げることとなった。また、主体部たる箱式石棺を再検出し、固化することができた。

当初予定の調査期間の大詰を迎えた1月11日、第10トレンチから溝状造構を検出、底付近から土師器が出土し、古墳時代の遺構の存在を決定的にした。

1月20日には安来市文化財保護審議委員の東森市良氏に現地指導していただき、その後の調査に多大な助言をいただいた。その指導によって、2月3日、本線ルート中央部の尾根上に、新たに第10-東、第10-西トレンチを設定、先に検出した溝状造構を明確にし、遺跡の全容解明に向けて調査は第2段階へ入った。翌日、同じ掘方の中に平行する2つの埋葬主体を検出、前期古墳であることが判明した。

1993年2月10日、ごく簡単な祭祀をして、無事終了したことを感謝し、2年越しの毎日数32日の試掘調査を終えた。

## 遺跡の地理的・歴史的環境

新林遺跡は、伯太川が中海にそそぐ流入域より南へ約1km入った東方に広がる丘陵上にある。その丘陵は通称社日山（日本台）を山頂（標高95m）とするもので、西側に北方、西方、南方に向って複雑に舌状の丘陵を広げている中の一つである。伯太川の対岸には城山（赤崎山）があり、西方に車山（註1）、その奥に京羅木山を望める。また、伯太川、吉田川、飯梨川つまり安来平野はもちろん中海をも一望することができ、素晴らしい眺望の地に遺跡は存在する。西側に宮内の集落があり、北には農業用水としての堤谷溜池がある。そこから標高39mを頂上とする遺跡までやや急峻な地形を持つ。

今回の概報では、周知の遺跡である「糺神社2号墳」（註2）も合わせて報告することとした。詳細は『調査の契機と経過』に譲ることとするが、新林遺跡の北方に繋がる形で存在しているため、地形的連続性を把握する意味においても報告すべきであると判断した。この「糺神社2号墳」をはじめ、遺跡周囲の丘陵上には古墳が数多く存在する。糺神社古墳群は、1～4号墳まであり、いずれも後期の古墳と思われる。1号墳は円墳、3号墳は径10mの円墳、4号墳は箱式石棺を持つものだが、現在消滅してしまった。南に埴輪を持つ若宮古墳、石棺のある御崎谷古墳、径25mの円墳あんもち山1号墳（註3）、四注平入り構造の山の谷横穴群など古墳時代の遺跡が集中している所である。しかし、今回の調査ではじめて明らかになった「新林古墳」は古墳時代前期のものであり、周辺では認知されているものがない。対岸の城山にある小谷土壙墓群（註4）は古墳時代前期のものであり、また併行した時期の可能性が高いことから、その関連が注目される。

また、当遺跡では中世墓も検出され、対岸にある中尾遺跡（註5）同様安来市内では数少ない中世遺跡として注視されるべきものである。

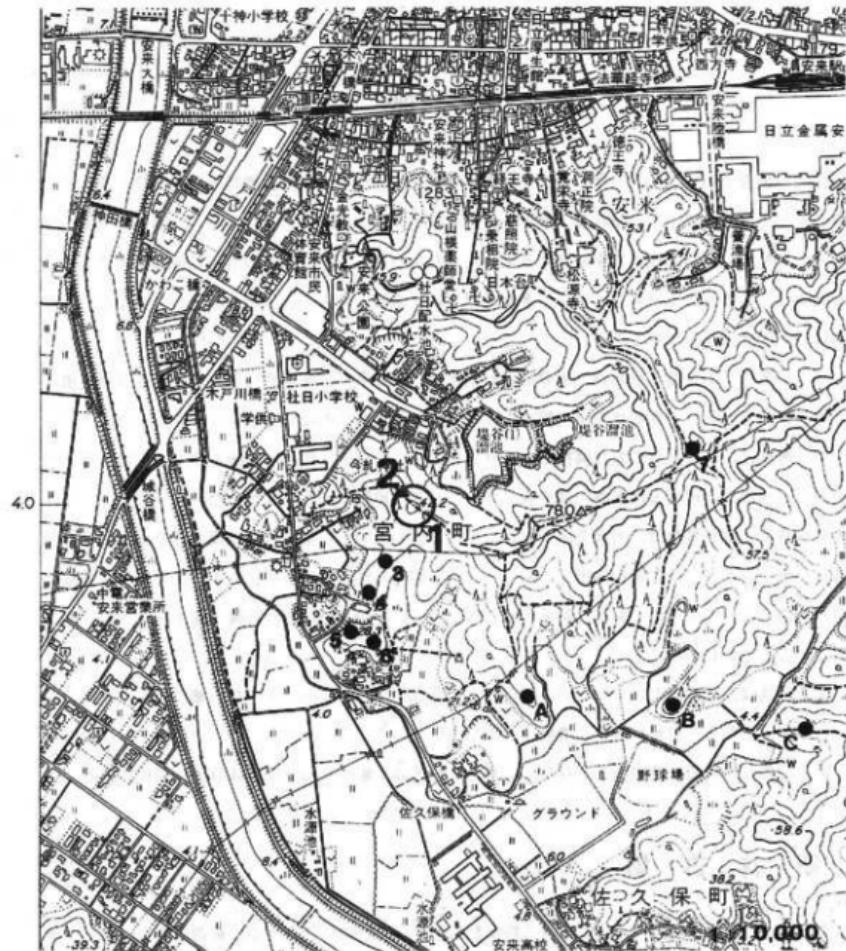
1) 田頃町にある標高207mのきれいな円錐形を呈した山。古代の通信施設である烽台として市指定文化財に指定されている。『出雲国風土記』では巣垣株と記されている。

2) 安来市『安来市誌』1970年

3) 安来市教育委員会『安来市内遺跡分布調査報告書』1991年

4) 内田 才、近藤 正、東森市良「安来平野における土壙墓」『上代文化36編』1966年

5) 安来市教育委員会『中尾遺跡』1985年



第1図 周辺遺跡分布図

- |           |             |
|-----------|-------------|
| 1. 新林遺跡   | 6. あんもち山古墳群 |
| 2. 亂神社2号墳 | 7. 日本台土壙墓   |
| 3. 若宮古墳   | A. 宮内遺跡     |
| 4. 御崎谷古墳  | B. 大原遺跡     |
| 5. 山の谷横穴群 | C. 曰コクリ遺跡   |

## 調査概要

今回の調査で明らかになったのは、2つの主体部をもつ円墳1基、古墳時代の土壙墓1基、中世墓2基、時期の不確定な土壙状墓5基である。この他、狭い古道と思われるもの、固い地山状の紐状遺構も検出したが、性格等を確認するにいたらなかった。また、周知の遺跡である札神社2号墳も調査し、本概要にまとめることができた。以下に、紙面の関係上、詳細な報告ができなかつた遺構について簡単な説明をしたい。

第1号墓は、中世墓と思われ、人骨のみが出土した。墓壁が崩壊状態にあり、人骨も侵食・風化が著しいため、部位や埋葬状況を把握できなかつた。今後科学的な分析をする必要があろう。

第3号墓は、第2号墓の北に隣接しており、長さ約100cm、幅約40cmを測る。やはり墓壁のかなりが崩壊し、規模等は推察の域を脱しない。また遺物の出土もなかつた。

第5号墓・第6号墓は、当調査区の最標高地に位置している。第5号墓は深さ50cm、第6号墓は60cmを測るが、全体像を検出しておらず、実質規模、性格等は不明である。ただ、第5号墓は第6号墓によって切られており、第5号墓の方が古く、しかも分段された覆土層から丁寧な埋葬をしていることがわかる。

第7号墓は、全検出をしていないが、現長275cm、深さ70cmの大きな土壙である。遺構のおよそ半分にあたると思われるが、遺物は出土していない。

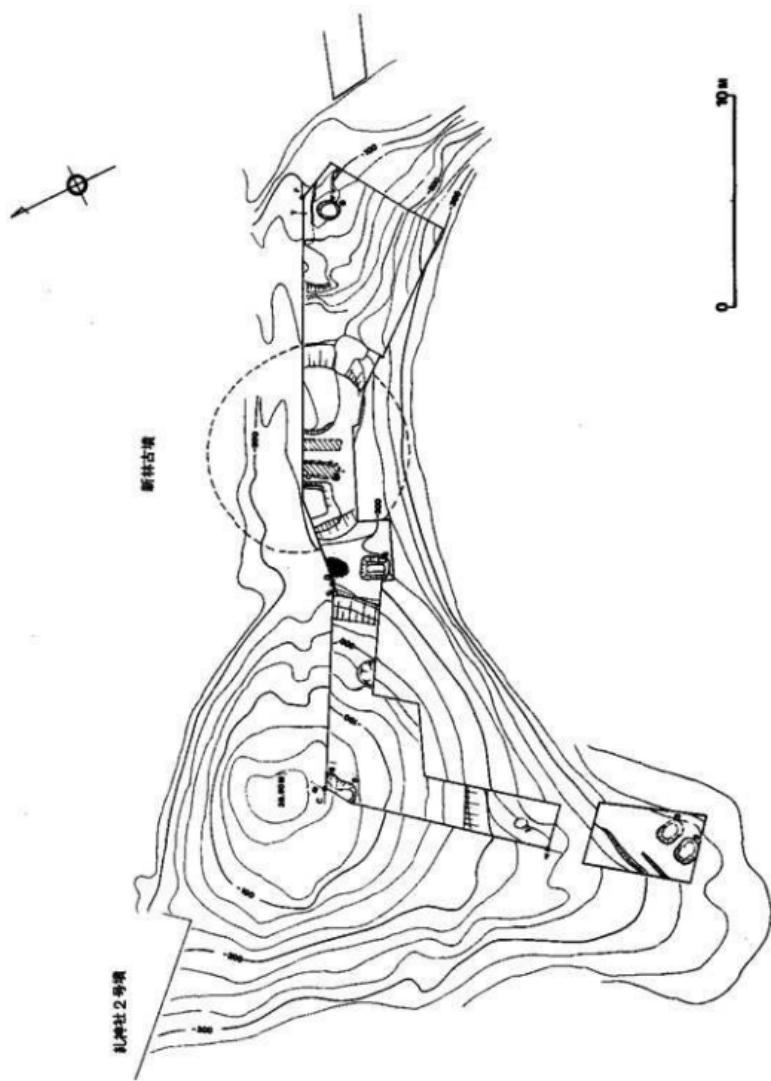
第8号墓は、第7号墓の南脇に存在し、長さ105cm、幅80cm、深さ40cmの規模である。

## 新林古墳

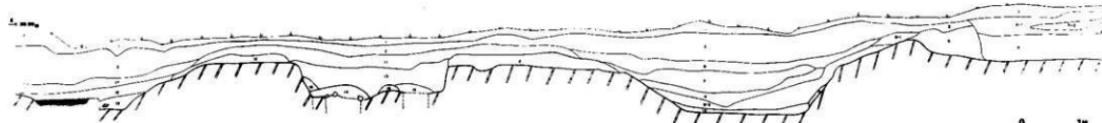
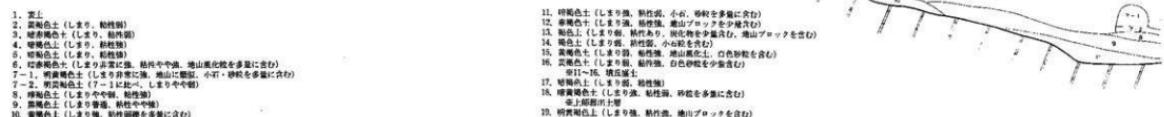
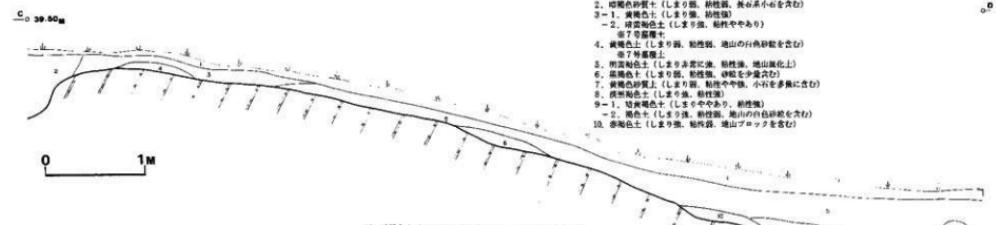
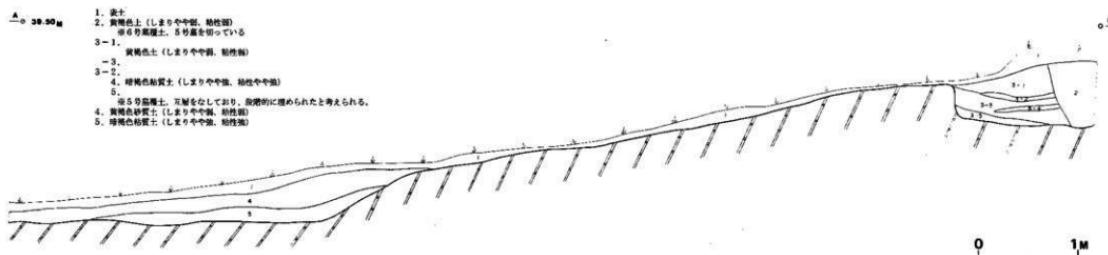
東西にのびる尾根上の二つの高まりに挟まれたやや低い位置に存在する。東西に長い、幅2.5mのトレンチの東側と西側で地山を削り込んだ、幅5m・深さ1.1m程度の周溝を検出した。調査区が狭いため墳形を想定するのは困難であるが、周溝がやや弧を描いていることから径10m前後の円墳である可能性が強い。墳丘は地山を削り出しており、段築はみられない。葺石・埴輪等の外表施設は無いが、東側の周溝の下場付近からは土師器の高杯が、西側の周溝の床面からは土師器の甕が出土した。

内部主体は幅2.5mの掘り込みの中に第1主体部と第2主体部が東西にならんで存在する。第1主体部は南端を確認していないが、長さ2m以上・幅1mである。方位は、N-34°-Eである。10~20cm大の石からなる石團状の施設が検出されているが、確認面で止めているため礎床とな

第2図 避難地形図および遭難状況

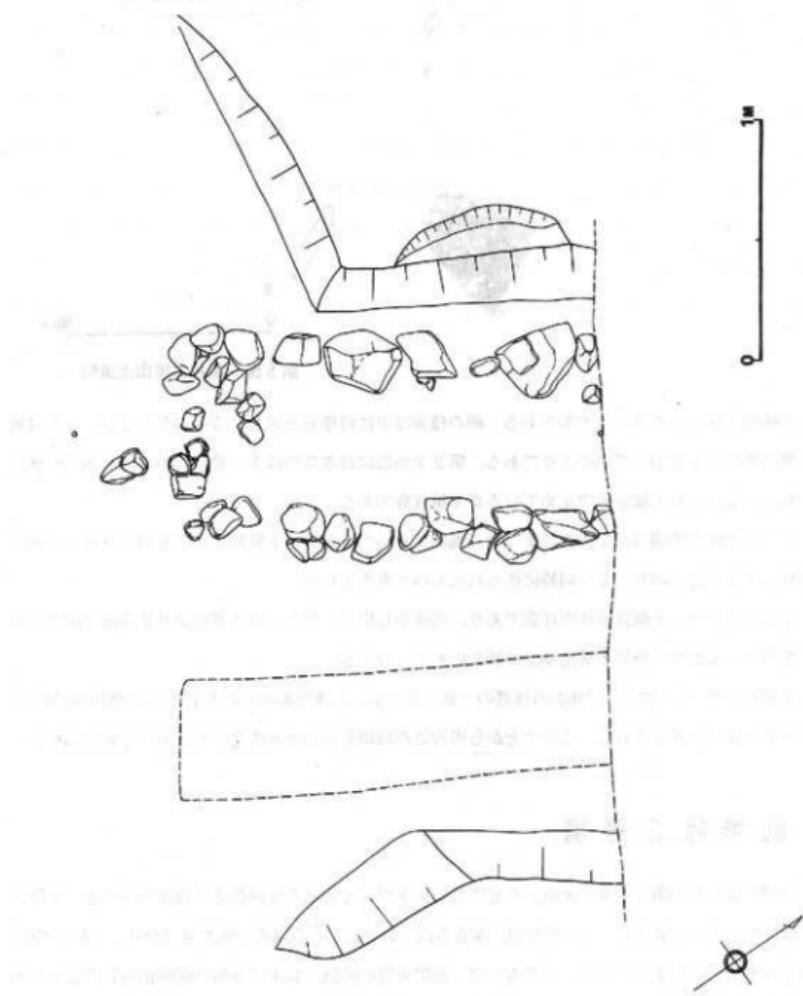


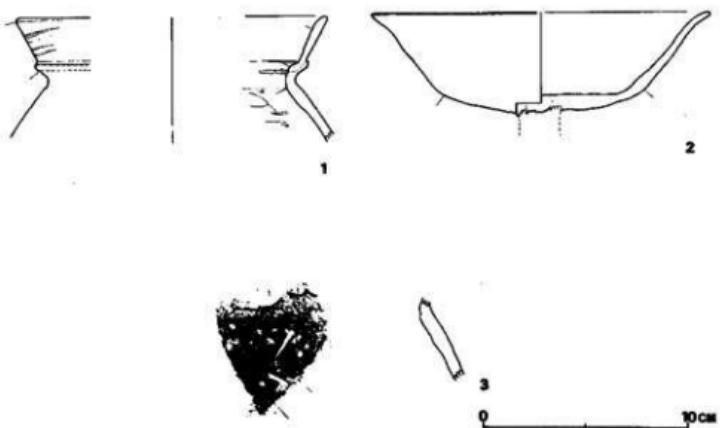




第3図 土層断面図

第4圖 新林古墳主体部





第5図 新林古墳出土遺物

るか礫構となるか現状では不明である。礫の種類は中に河原石と思われるものがあるが、大半は周辺域の地山石を使用しているようである。第2主体部は長さ2m以上・幅0.5mの掘り込みが検出されている。これも確認面で止めているが木棺直葬である。

2つの主体の間隔は、中軸線で1.2m、端間で0.5mを測る。土層断面からも同じ掘り込み内に平行して存在しており、2つ同時に作られたものと考えられる。

土器（2）は、土師器高环の坏部であり、周溝から出土したが、周溝底面より25cm上位のレベルで出土しており、当古墳築造期より新しいものといえる。

土師器の壺（1）は、口辺部から体部の一部であるが、周溝底面からの出土で、古墳時代前期（小谷式併行期）と推定される。このことから当古墳の時期もおのずと決定できるものと考えられる。

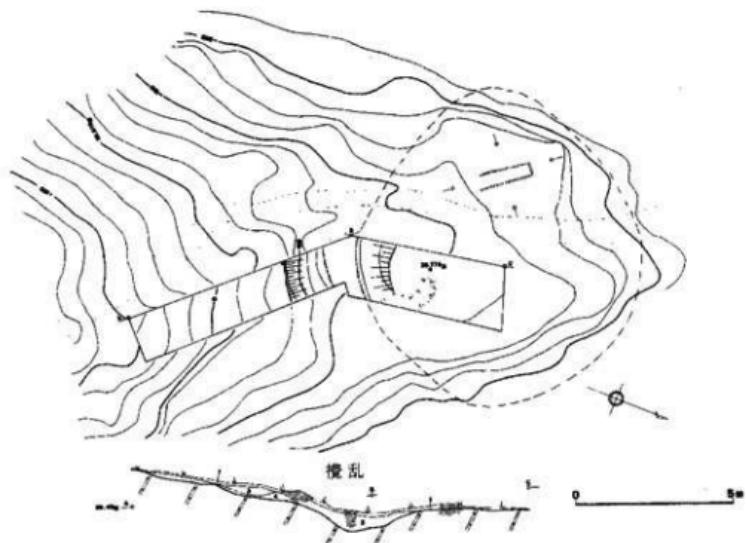
## 糺神社2号墳

今回の調査域の頂上である地点より北に20m下がった地点に糺神社2号墳は存在する。糺神社古墳群のひとつであるが、40数年前に調査されており、その際箱式石棺が見つかり、中から刀剣、須恵器が出土したようである。当調査では、古墳規模の確認、および石棺の図面化を目的として再調査に踏み切った。

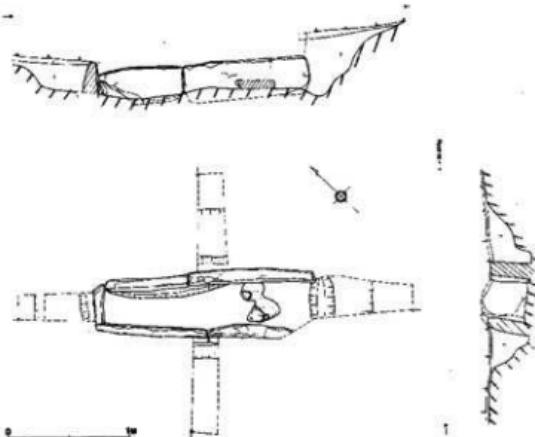
古墳規模は墳端からの概算で、径約10mの円墳と思われるが、対面の周溝を確実に検出してい

ないので、明言は避けるほかない。検出した周溝は上端幅325cm、下端幅で140cm、深さ40cmを測る。また、推定される中心から東側に2mはずれた地点に扁平な凝灰岩（荒島石と思われる）を並べた箱式石棺（前述）が見つかった。規模は長さ190cm、外幅42～57cm、内幅27～38cm、高さ27cmを測り、蓋石を全く欠き、南東の短辺側石も欠いていた。方位は、N-45°-Wである。底面は地山であり、北東壁沿いに溝らしきものが認められるほか施設らしきものはなかった。掘方は、長辺上端で280cm、下端で250cm、短辺上端で130cm、下端で75cmあり、側石固定のために10cmの掘りこみを作っている。前述したように既に調査済であることから、出土遺物はなかったが、側石の破片が見つかったほか、南東側から40cmの所に枕石が検出された。風化のため変形しているが、現状では脛筆型を呈しており、長さ30cm、最大幅25cm、高さ7cmを測る。掘方土層は黄褐色土で、しまりが強く、小さな地山ブロックを含んでいた。

この石棺は明らかに中心からはずれており、第1主体ではないようである。第1主体は、今回の調査でのトレンチで検出されなかったが、ほぼ中央に位置するであろう。その意味でも、この石棺は古墳築造より時期を新しくするものであろう。



第6図 粿神社2号墳



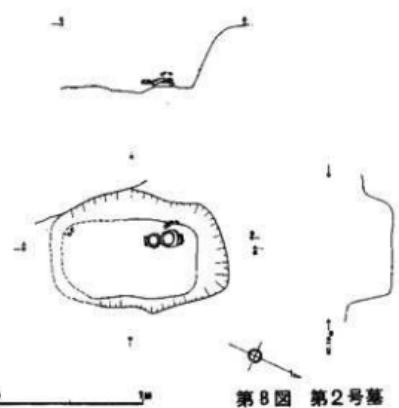
第7図 札神社2号墳主体部

## 第2号墓

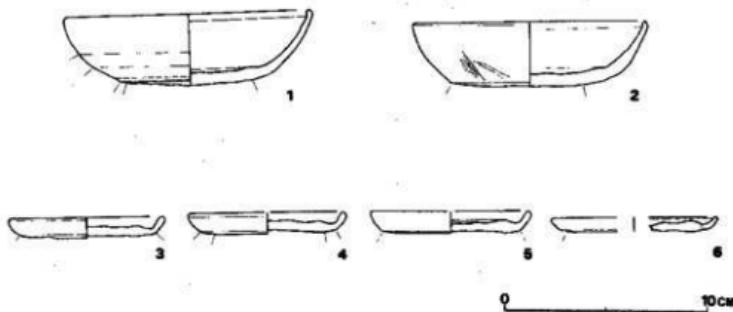
規模は長辺推定約120cm、短辺80cm、深さ47cmを測り、底面は長辺推定90cm、短辺55cmを測る。方位はN-24°-Wである。平面形は橢円形に近い隅丸長方形で、断面形はU状を呈している。また粘性の弱い黄褐色土の土層状態であったが、地山と似た土質であったことから、掘方の土を埋土に使用したようである。底面は平坦で、壁との境界は明瞭である。

出土遺物は壺形土器3点、灯明皿5点、鉄製品2点であった。出土状況は、墓の北西隅にお互いの口を合わせた形の灯明皿を2列に並べ、その上に逆さにした壺を被せるように供えている。そして、西壁と東壁際から墓壙のやや高いレベルから釘あるいは鍼と思われる鉄製品が出土した。このことから、木製の棺に遺骨を納め、土器類はその脇に重ねて副葬したものと思われる。

出土した土器はいずれも土師質のもろいもので、摩耗が激しい。右回転ロクロを使用、底部切り離しは回転糸切りしており、同時期に製作されたと考えられる。灯明皿は器高が非常に低く、洗練されたフォルムをもっている。また、使用痕が認められる。



第8図 第2号墓

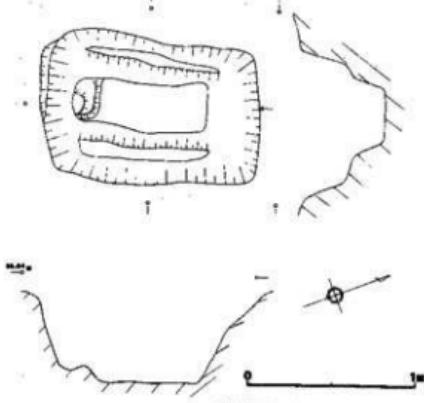


第9図 第2号墓出土遺物

#### 第4号墓

規模は $130 \times 85 \times 50\text{cm}$ で途中に段を作出し、二段掘りにしている。底面は $80 \times 30\text{cm}$ である。方位はN-21°-Eである。平面形は隅丸長方形、断面形は山字形を呈しているが、短軸方向だけに認められる。土層状況は、掘方の土をそのまま埋土に用いたと思われ、粘性が強く、しまりもある黄褐色土であった。底面はほぼ平坦であるが、南壁には幅17cm、高さ10cmほどの方形の台を作出している。これは枕石と思われ、丁寧な造りの墓壙といえる。

出土遺物はまったく検出されなかったが、東側に位置する新林古墳の周溝底部に造られていること、周溝の上層状況がその後の加工を受けているように見えないことなどを考えると、古墳より新しいものではあるが、それほど時間が経っていないと考えられる。



第10図 第4号墓

# 遺物観察表

## 新林古墳

番号	器形	法量	残存度	器形・整形の特徴	1.粘土 2.焼成 3.色調	備考
1	壺	口径 (15.2) 頸部径 (12.1)	口辺 部～体 部の一 部	2段目の破はわずかだが反る、口辺～体部は強く外反する。内側に接合痕が残る、口辺部は直線的。(外 面) 口辺部や斜方向の強いヨコナデ。2段目ナデを 作出した後、丁寧にナデしている。体部横方向のナデ。 (内面) 口辺部横方向のナデ、頸部は指による整形、 体部横方向のケズリ。	1.微細、雲母粒・ 長石粒 2.不良 3.〈外面〉黒色、口 唇部一帯赤色(内 面)褐色・黄褐色	
2	高壺・ 壺部	口径 (16.6) 現器高 (5.0)	壺部のみ、 口辺 の大部 分を欠 く	壺をなさないで内巻しながら立ち上がり、口辺 部で外反する。(外面) 口辺部～体部は横方向の ナデ。壺底部は不整方向にヘラケズリ、脚部と の接合のための細いホゾを作出(ヘラ切りか?)。 (内面) 体部ヨコナデ?	1.大小長石粒・雲 母微粒・細砂粒 多量 2.やや不良 3.黄褐色、内外面 赤色顔料によつ て明赤褐色、所々淡黄褐色	摩耗著し い、内面 が特にひ どい
3	壺・頸 部		頸部～ 体部の一 部	〈外面〉横方向のハケ目?、体部に羽状沈線が ある。(内面) 不明	1.長石粒・砂粒の 細いのが多量 2.普通 3.〈外面〉明赤褐 色丹塗りか? (内面) 褐色	内面、摩 耗が著し い。

## 第2号墓

番号	器形	法量	残存度	器形・整形の特徴	1.粘土 2.焼成 3.色調	備考
1	壺形土 器	口径 12.3 底径 6.5 器高 3.5	完形	口唇部で内巻して端部に至る。(外面) 底部回転 糸切り後、ナデによる調整、一度目の糸切りに 失敗、二度施行、体部は回転によるナデ。(内面) 回転によるナデ後に、所々変速的なナデ、※右 回転と思われる。	1.細砂粒 2.普通 3.明黄褐色	風化著し い、口唇 部の半 50%は摩 耗している。
2	壺形土 器	口径 11.6 底径 6.5 器高 3.2	2/3	口唇で内巻し端部へ、内外面で、底部・体部境 で屈曲線を持つ。(外面) 右回転糸切り、未調整、 体部回転ナデ。(内面) 回転ナデ後、底部不整方 向のナデ。	1.細砂粒 2.不良 3.〈外面〉明黄 褐色 〈内面〉 褐色	摩耗著し い、特に 内面は斑 点状に剥 離している。
3	灯明皿	口径 7.5 底径 6.8 器高 1.0	完形	底部から内巻ぎみに立ち上がる、底部と口辺部 つなぎ部は薄く、底部は厚い。(外面) 底部切り 離し後、ヘラ切りによる調整、口辺部回転によ るナデ。(内面) 回転によるナデ後、指で調整。	1.細砂粒、植物 繊維を含む 2.不良 3.明黄褐色	摩耗著し い
4	灯明皿	口径 7.6 底径 6.7 器高 1.1	3/4	上げ底ぎみのやや厚い底部から内巻ぎみに立ち 上がり、口唇に至る。(外面) 右回転糸切り、底 部外側一部ナデ。(内面) 回転によるナデ。	1.細砂粒 2.やや不良 3.明黄褐色	
5	灯明皿	口径 (8.0) 底径 (6.8) 器高 1.1	口辺部の 1/2 底部のご く1部を 欠く	内面に回転による凹凸がある。(外面) 底部回転 糸切り、口辺部ヨコナデ。(内面) 底部・口辺部 とともに回転によるナデ。	1.砂粒・長石粒 等細 2.やや不良 3.明黄褐色	材質が不 良らしく、 特に底部 は剥離等 が著しい
6	灯明皿	口径 (5.3) 底径 (7.1) 器高 0.7	1/3	底部は厚く、凹凸(波状)が著しい、口唇は薄 く、小さい。(外面) 底部回転糸切り後、ヘラ削 りによる調整(方向バラバラ)、底部と口唇間に 隙があり、接合痕と思われる。(内面) 回転によ るナデのみ、その後の調整なし。	1.長石粒・赤色 砂粒・砂粒、 細・少量 2.やや不良 3.明黄褐色	

※法量の( )は推定値

単位: cm

## ま　と　め

新林古墳は、2つの主体をもつ前期古墳である。径約10m、高さ約1.1mの規模で、現状では厚いところで30cm程度の盛土をもっている。立地的に、尾根上中のやや低地に位置しており、調査前には古墳の存在を予知することができなかった。

この古墳の築造時期については、周溝底面出土の土器（第5図-1）が層位的にみても核心をついているものと思われる。これは大木権現山1号墳1号土壙出土の甕に類似しており（註1）、大木権現山から小谷にかけての時期とみなして間違いないだろう。更に、同じ掘り込み内に2つの同時埋葬された主体を持つものも珍しく（安来市内では例をみない）、菅田山古墳（註2）、山地古墳（註3）に例をみるとくらいであろう。しかし、両主体とも全域を検出しておらず、確認面でとめているため、詳しい形態・副葬品などは解っていない。

この地は中世にも墓域となっていたようである。副葬品をともなった形で検出されたのは第2号墓だけであり、同時期ではないかと思われるものが、あと2基存在している。第3号墓は、第2号墓に平行して作られており、残存している短壁の規模・構造から、第2号墓と時間の差は少ないとと思われる。第1号墓は、第2・3号墓から離れてはいるが、方位や斜面に対する位置などが類似していることから、これも第2・3号墓との通時的格差は狭いのではないかと考えられる。

坏形土器、灯明皿（小形皿）といいういわゆる土師質土器が出土したが、松江市黒田畦土居第IV調査区上層出土土器に形態調整等が類似している（註4）。その報告書内では鳥取県東伯郡東郷町門田遺跡（註5）出土土器群を参考に下限を15世紀としており、当遺跡もその下限に近い年代を想定できるものと思われる（註6）。ただ、形態差の少ない土器であるし、山陰独自の編年が確立していないので、速断できないところである。

以上のほかは、いずれも時期決定不可能な遺構である。第5・6号墓に関しては、当遺跡の最高位付近に位置することや、土層から見る埋葬状況から判断して、弥生時代あるいは古墳時代の墓壙の可能性が高い。また、弥生墳丘墓ならば、付近にまだ多くの墓壙が存在していると考えられ、古墳であるならば、中心主体の可能性は低いと考えられる。

同様に、第7号墓も土壙墓か古墳の埋葬主体であると考えられる。現段階で長辺2m以上を測るものだが、全長はまだ把えていないほどの大きなものである。古墳の主体ならば、新林古墳の東側周溝との関連が問題になってくるが、第7号墓の北東にはより高位の急峻な斜面があり、周溝を画したと判断できる状況にない。とするならば、弥生～古墳にかけての土壙墓の可能性が高くなってくる。

このように、試掘調査のために、きわめて限定された範囲での明確な答えを提示できること

を理解していただくほかなく、今後の調査・研究にそれを委ねたいと考える。

最後になったが、新林古墳は前期古墳で珍しい形態をもっていること、当遺跡は弥生時代末から中世に至るまで墓域として存在していたことを明示できる。

#### 註 記

- 1) 東森市良氏の御教示による。東出雲町教育委員会『大木樺現山古墳群』昭和54年3月  
東側周溝出土の高杯も小谷土壤墓出土のものと姿形が類似しており、小谷式併行期においても差しつかえないのではないかと思われた。しかし、脚部が細い点や、环底部が非常に平らである点等の形態差からより新しい型式と判断するに至った。
- 2) 松本岩雄氏の御教示による。
- 3) 出雲市教育委員会『山地古墳発掘調査報告書』1986年3月
- 4) 三宅博士氏の御教示による。
- 5) 松江市教育委員会『黒田唯土居遺跡』1984年3月、P20
- 6) 中世土器の研究として、以下の文献を参考としたい。  
日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究』1985年10月  
日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究Ⅱ』1986年12月  
日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究Ⅲ』1987年12月  
日本中世土器研究会『中近世土器の基礎研究Ⅳ』1989年11月

図版 1

新林遺跡遠景(西から)



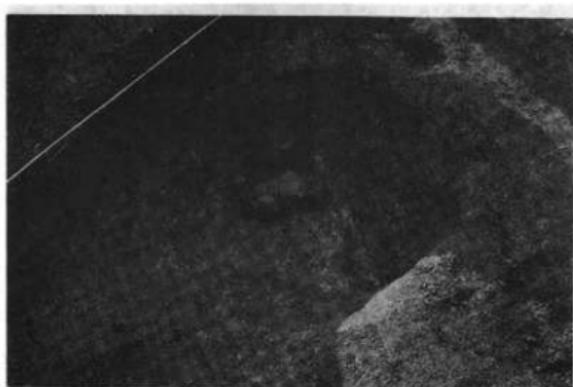
図版 2

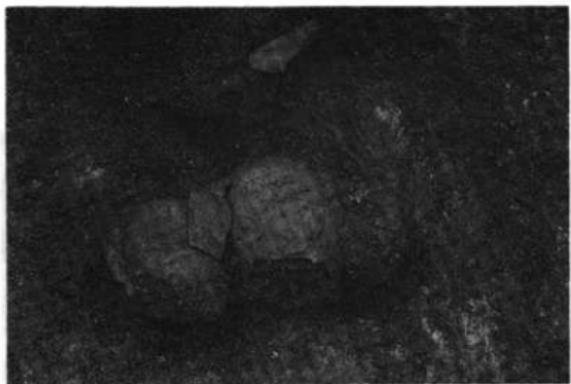
第1号墓



図版 3

第2号墓





図版4  
第2号墓遺物出土状況



図版5  
新林古墳主体部(南から)



図版6  
新林古墳西侧周溝遺物  
出土状況

図版7

新林古墳東側周溝  
土層状況



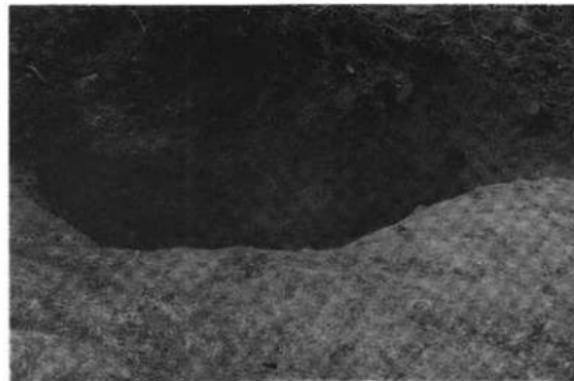
図版8

第4号墓



図版9

第5・6号墓  
土層状況



図版10  
第7号墓 土層状況  
（南から）



図版11  
糸田原  
札神社2号墳（南から）



図版12  
糸田原  
札神社2号墳主体部  
（南から）

